

山科区御陵牛尾町出土の遺物について

熊井 亮介

1. 経緯 (図1)

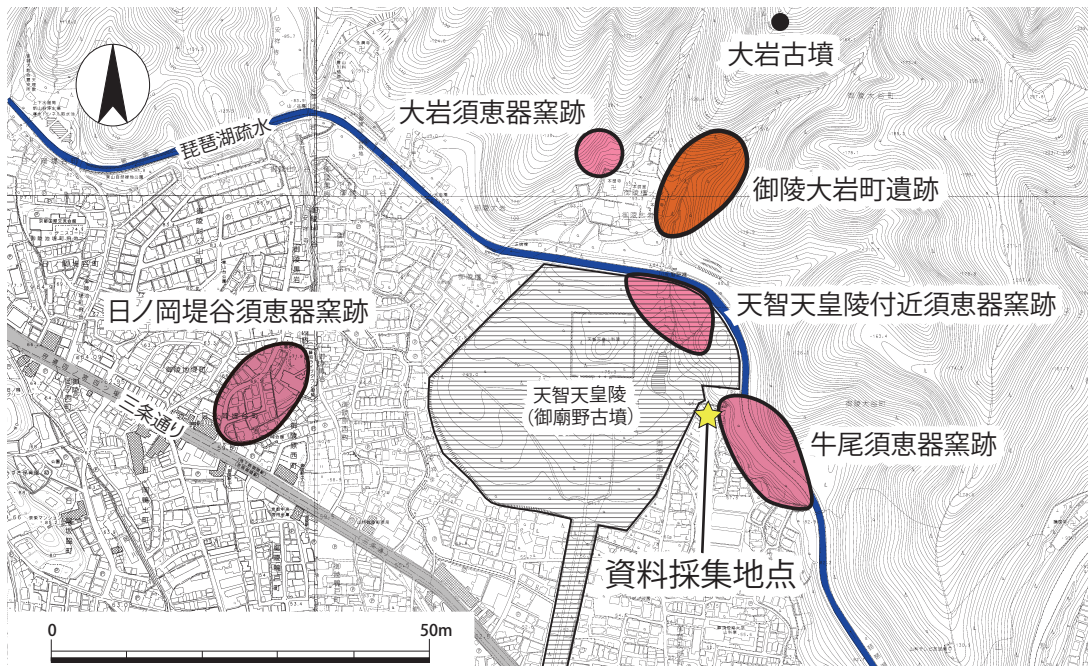
本稿では令和7年度に京都市に寄贈された遺物に関して報告を行う。

寄贈資料は、約50年前に京都市内で採集された遺物である。寄贈者からの情報によると、出土地は山科区御陵牛尾町にあたり、現在は疏水の西側に近接する宅地となっている。当該地で実施された造成工事の際に遺物が出土し、それを採集し現在まで保管していたとのことである。

出土地点は、令和7年時点で周知の埋蔵文化財包蔵地「牛尾須恵器窯跡」の北西縁辺にあたる。この山科盆地北西部には、他

にも日ノ岡堤谷須恵器窯跡や大岩須恵器窯跡、天智天皇陵付近須恵器窯跡といった窯跡群、そして製鉄遺跡と考えられている御陵大岩町遺跡などの生産遺跡が集中することが知られている。しかし、その一方で本格的な調査事例は少なく、現状では遺跡の実態については不明瞭となっている。また、付近は疏水建設など大規模工事・開発が近代以降に急速に進んだこともあり、その影響により損傷・消滅した遺跡も少なくないと思われる。

このような状況の中で、寄贈された資料は遺跡の実態把握を進めるために重要な資料と考えられることから、基礎整理を行い概要について報告を行うこととした。



1 資料採集地点および周辺の遺跡分布図 (1:10,000)

2. 寄贈品の内容について

(1) 概要

資料の全体量はおおよそコンテナ1箱分で、大部分が破片資料である。全部で164点ある。全て須恵器で、器形は杯H、杯G、高杯、盤、甕、壺が確認できる。破片数による内訳は、杯H（蓋・身）が8点、杯G等（蓋・身）が103点、高杯が1点、盤が1点、壺甕類が42点、不明が9点である。現状では出土状況や遺物の全体量等が不明であり、あくまで参考値に過ぎないものの、通常では窯跡出土品の中で多くのパーセンテージを占める甕類が少ない点は特徴的である。

焼け歪んだり焼け膨れの著しい資料、窯体片が融着した資料が多く確認できることから、灰原出土品の可能性が想定できる。以下、各遺物の詳細を述べる。

(2) 個別説明

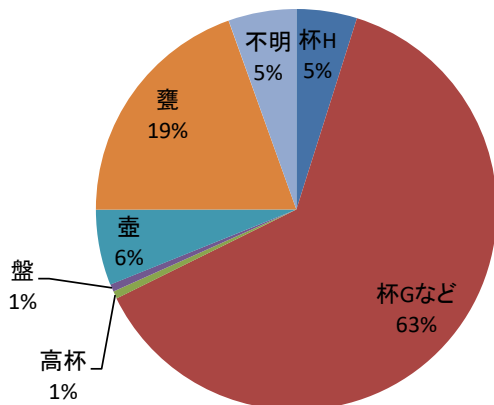
1～6は杯Hと考えられる。1～2は蓋、3～6は身である。1は口径12.0cm、器高3.2cm。天上部はヘラギリによって平らになる。肩部は緩やかに開いたのち下方へ屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。2は

小片のため径は不明である。外面はロクロナデののち、肩部と体部に1条ずつ凹線を巡らす。口縁端部は丸くおさめる。3は口径9.3cm、最大径10.7cm、器高2.4cm以上。4は口径9.8cm、最大径11.4cm、器高2.8cm以上。いずれも底部はヘラギリで、口縁には内傾した短い立ち上がりがつく。5・6は口径・器高は不明である。6は他に比べて砂粒の移動した痕跡を確認できる範囲が広く、肩部のみロクロケズリ。

7～28は杯Gの蓋である。7～12は天上部のみ、13～15は天井部～口縁部、16～28は口縁部付近のみ残存する。ツマミが脱落している個体が多く、同一個体でツマミと口縁端部の双方の形状が把握できるものはない。

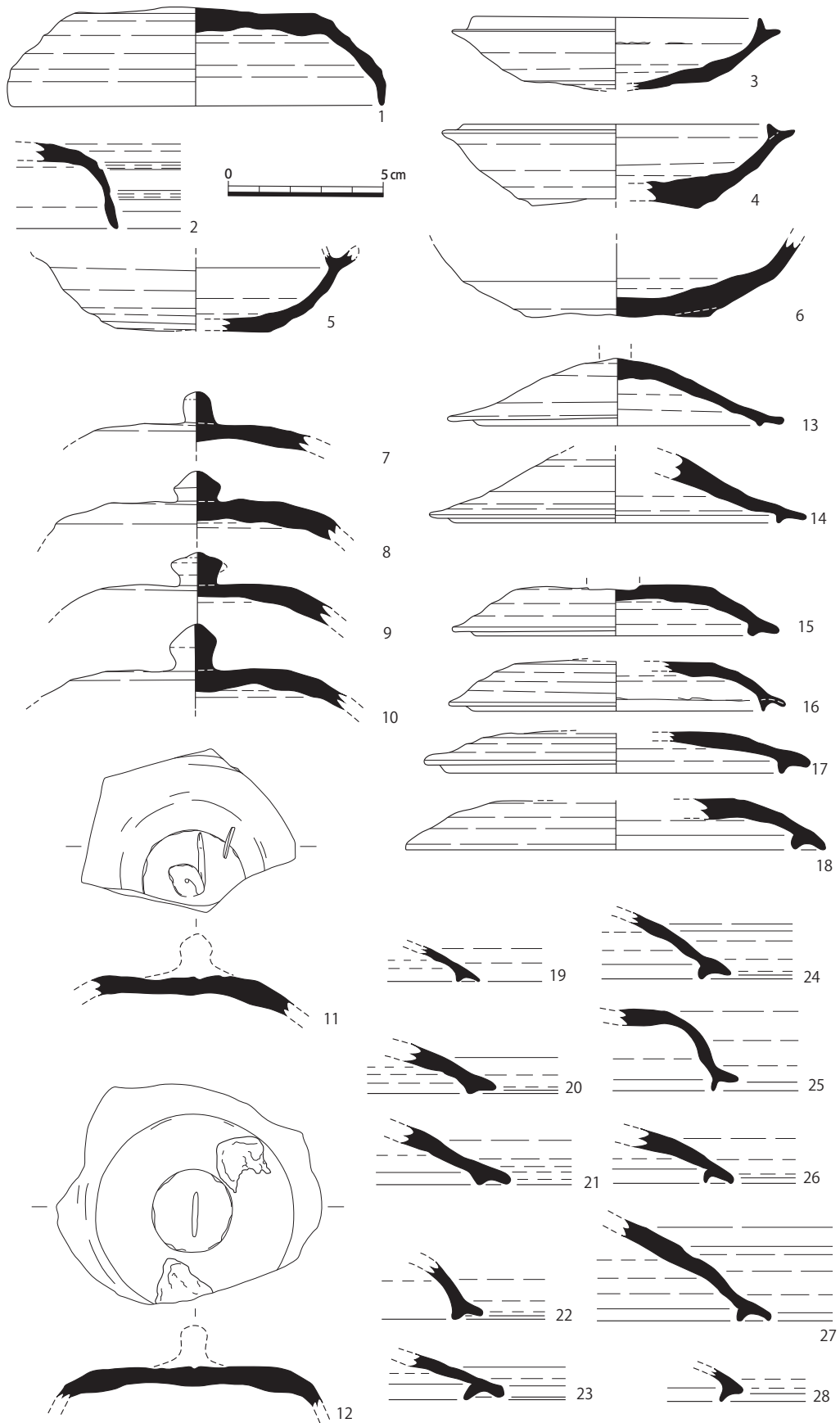
ツマミの形状は2種類確認でき、7は乳頭状、8～10は宝珠状の形状を呈する。11・12は、中央部のツマミが脱落した個体で、12には窯体片が融着する。ツマミの脱落痕の中央部には、粘土の接合痕や棒状工具を用いた「一」字形の凹線が確認できる。この凹線は蓋の位置の目印もしくは接合強度を高めるための工夫である可能性が想定できる。

蓋の形状は、15～18のように肩部に丸

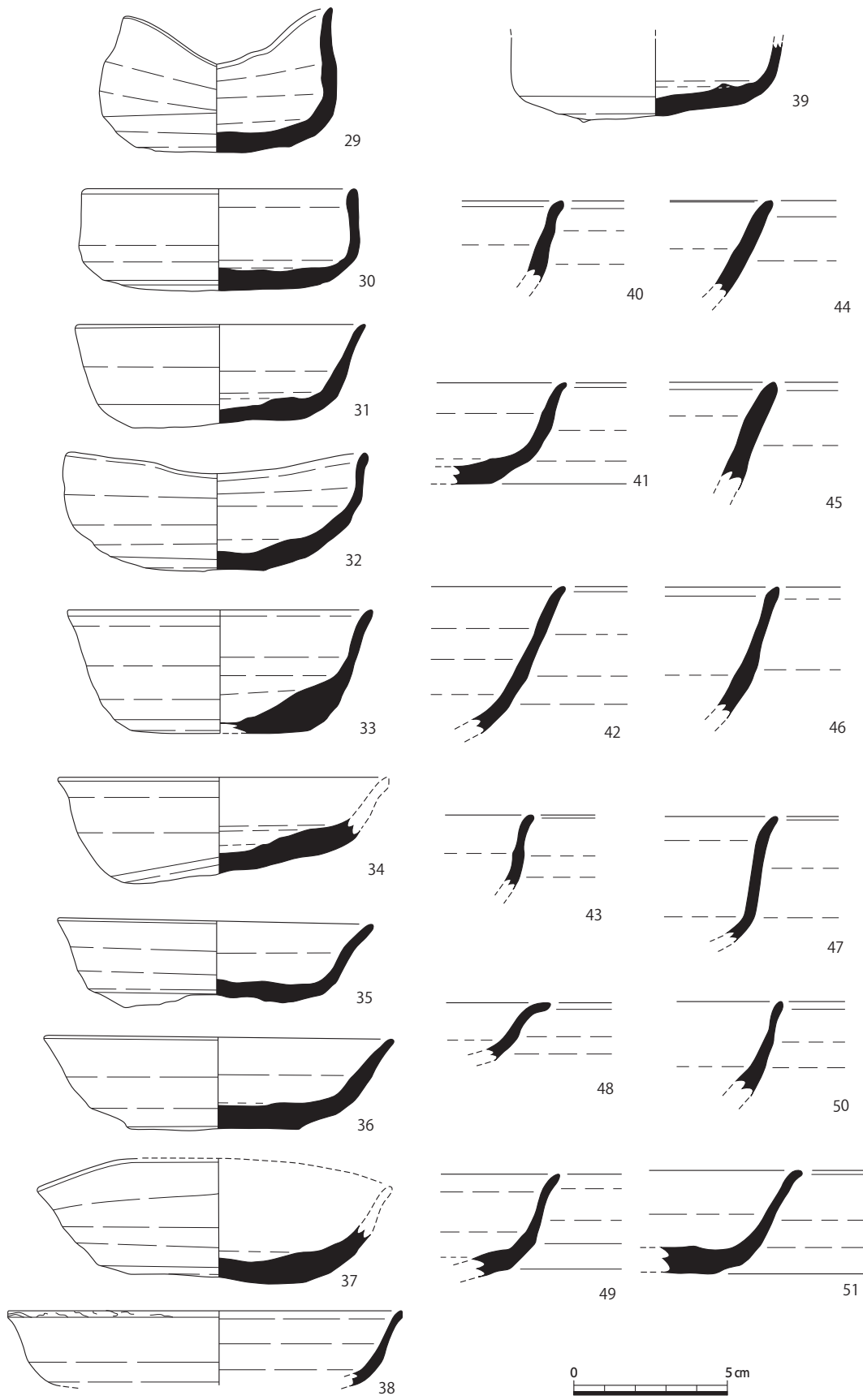


器種	部位	破片数		合計
		実測分	その他	
杯H	蓋	2	0	2
	身	6	0	6
杯Gなど	蓋	24	12	36
	身	28	39	67
高杯	—	1	0	1
盤	—	1	0	1
壺	—	4	6	10
甕	—	2	30	32
不明	—	0	9	9
合計	—	68	96	164

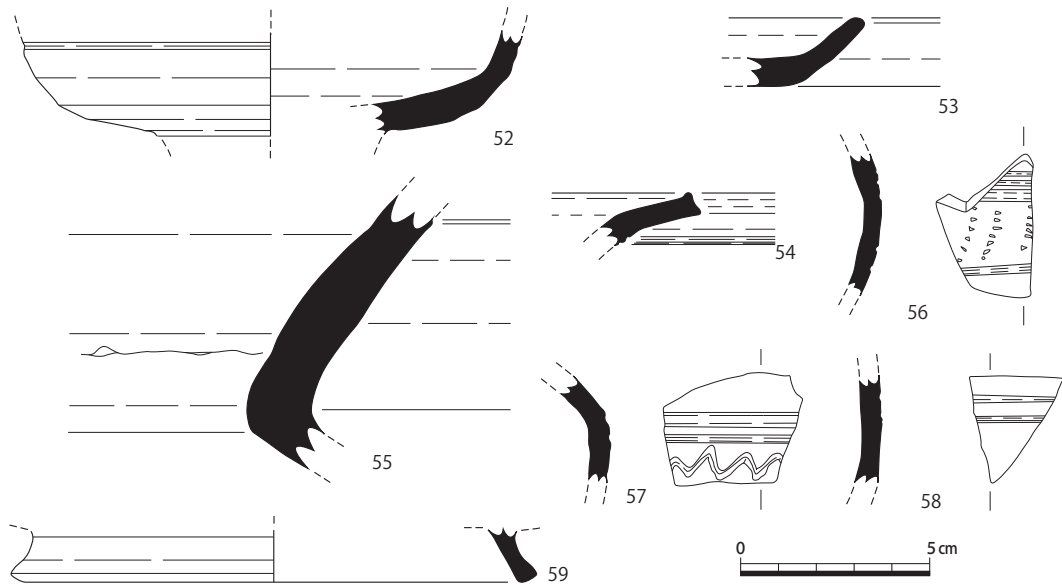
2 寄贈資料の内訳



3 遺物実測図① (1:2)



4 遺物実測図② (1:2)



5 遺物実測図③ (1:2)

みを帯びるものが多いが、13・14のようになで肩状も確認できる。この二種を比較すると、なで肩状の方がロクロケズリの範囲が広い傾向にある。13は最大径10.9cm、口径9.1cm、器高2.15cm以上。14は最大径12.1cm、口径10.4cm、器高2.2cm以上。15は最大径10.5cm、口径9.0cm、器高1.6cm以上。16は最大径10.6cm、口径9.4cm、器高1.6cm以上。17は最大径12.5cm、口径9.8cm、器高1.35cm以上。18は最大径13.6cm、口径11.6cm、器高1.65cm以上。いずれも内側にかえりを有する。

29～51は杯身である。本資料は破片資料が多数を占める事、焼け歪みが著しく口径や形状が実測箇所によって異なることから杯類は一括で報告する。蓋では確実に杯Bと判断できる資料がないことから、杯G及び杯Aがここに含まれるものと考えられる。

29～32と34～38はいずれも焼け歪んでおり、正確な口径は不明である。一応の

大きさを示すと、29は平均口径9.5cmで器高4.5cm。30は口径8.9cmで器高3.3cm、31は口径9.4cmで器高3.4cm。32は平均口径10.8cmで器高3.8cm。33は口径10.0cmで器高4.0cm。34は口径10.6cmで器高3.5cm。35は口径10.1cmで器高2.9cm。36は口径11.4cmで器高3.6cm。37は口径不明で器高3.9cm、38は口径12.8cm、器高2.45cm以上。

底部はいずれもヘラギリである。口縁部端部に面を有するものと丸くおさめるものの二種類が確認できる。

29・30・35は底部に重ね焼きの痕跡があり、かつ内面の一部に自然釉が付着する。また、38は口縁端部に蓋の一部が融着した痕跡が確認できる。

52は高杯と考えられる。杯部の底面はロクロケズリが確認でき、その後に脚が付く中央部にロクロナデを施す。割損しており不明瞭だが、体部に沈線が巡る。

53は小片であるが盤の口縁と思われる。底面はロクロケズリ。

54・55は甕である。54は口縁部で端面にナデによる面を有する。割損しており不明瞭だが、頸部に沈線が巡る。55は頸部である。内面の体部側のみタタキ痕が確認できる。

56～58は壺と思われる。56は右上がりの櫛描列点文が確認でき、その上方に2条、下方に1条の沈線を巡らす。57は棒状工具を用いた波状文があり、その上方に2条の沈線を巡らす。58は2条の沈線を巡らす。

59は高台である。上面は剥離痕が確認できる。幅が広く、外径も大きくなることから、壺や盤などの底部に伴うものと考えられる。なお、破面に部分的に窯体と思われる破片が付着していることから、焼き台等に転用された可能性もある。

(3) 帰属時期について

本資料は約半世紀前の採取品であり、かつ出土状況が不明である。しかし、寄贈者からの聞き取り内容、出土地点や遺物の状況を見る限り窯跡出土品の可能性が高く、時期的にも一定程度のまとまりを有する。

これらの遺物の内容を見ると、①少数ながら杯Hが確認できること、②杯Gが多数を占めること、③杯Bと思われる資料がほとんど無いことから、飛鳥Ⅱ様式に位置付けることが可能と思われる¹。

3. 本資料の位置づけ

(1) 山科盆地の位置と遺跡

山科盆地は、東山によって京都盆地と画された地域で、山城国の北東隅にあたる。三方を丘陵に囲まれて、南下すると巨椋池東岸へと至る。この地形的条件から、山城

国の中でも独立した一地域として認識することが出来る。

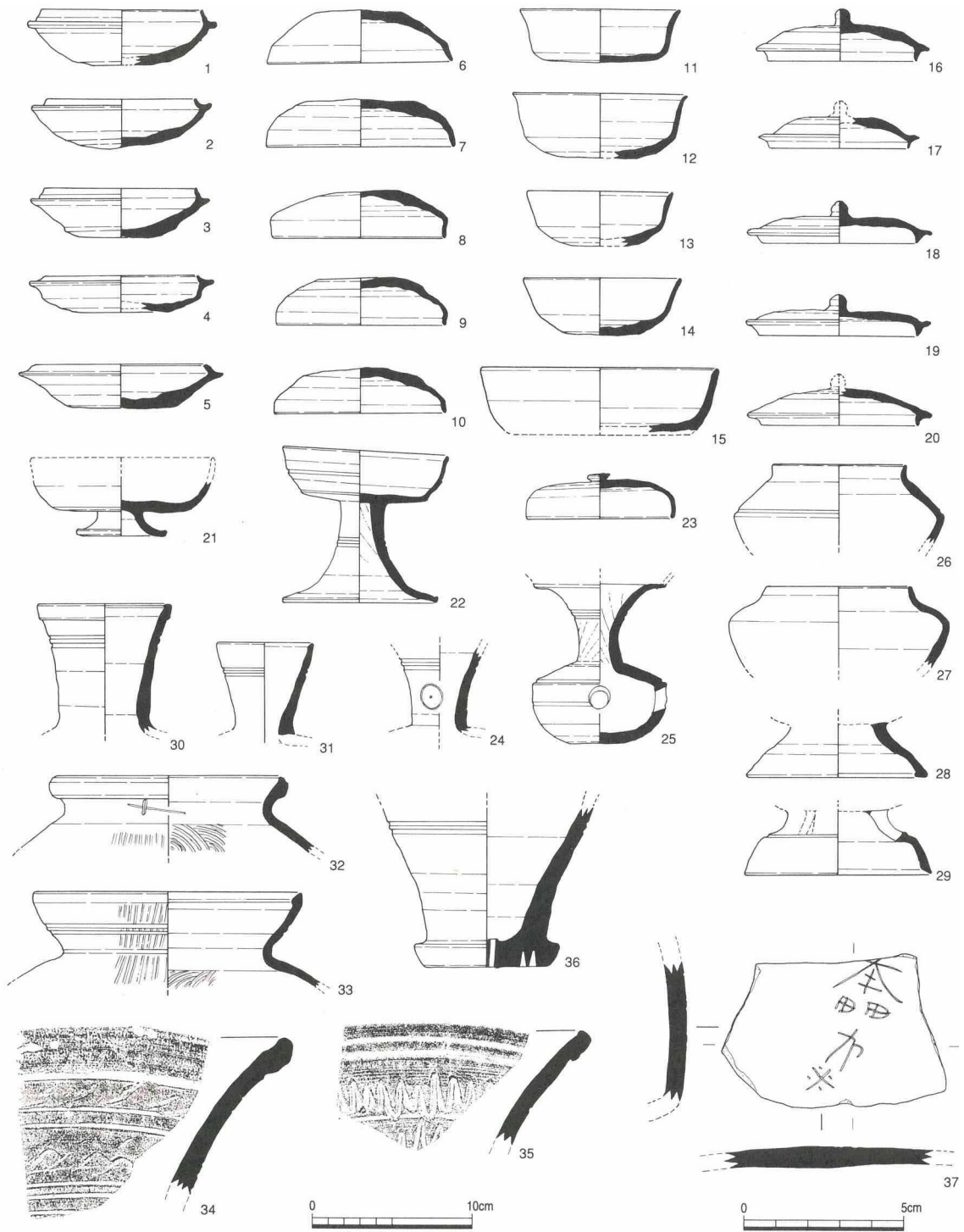
ここでは後期旧石器時代以降、現在に至るまで継続して人の活動痕跡が刻まれているが、特に古墳時代から飛鳥時代にかけての活発な動向は目を引く。

古墳時代から飛鳥時代の遺跡を抽出すると、種別では集落、古墳、生産遺跡、寺院が確認できるが、中核となるのは中臣遺跡である。山科盆地の南部に位置し、山科川と安祥寺川に挟まれた独立丘陵を中心に展開する遺跡で、後期旧石器時代～室町時代の遺構・遺物が確認されている。古墳時代から飛鳥時代にかけては、竪穴建物や掘立柱建物、古墳などが確認されている。弥生時代後期～古墳時代前期には多くの竪穴建物などが確認されており、出土した近江系の受口状口縁甕などは、古くから交通の要衝であったことを示唆する。

古墳時代中期に遺構数は減少する傾向にあるが、中臣遺跡79次調査では中期後半に小型方墳が確認されており、これを初期群集墳とする評価がある²。また、同調査では韓式土器や鳥足文を有する須恵器甕など、百済系の遺物が確認できる点も注目される³。

その後、古墳時代後期末～飛鳥時代には掘立柱建物や竪穴建物が増加する。当該期には、中臣十三塚や旭山古墳群、醍醐古墳群で群集墳が造営されている。これらの群集墳は概ね7世紀前半までに収束すると考えられる。

この時期に生産遺跡も確認されている。日ノ岡堤谷須恵器窯跡や大岩須恵器窯跡、天智天皇陵付近須恵器窯跡、大峰窯跡、朝日稲荷窯跡といった窯跡のほか、詳細不明

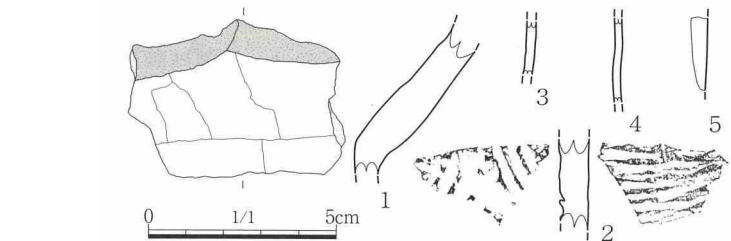
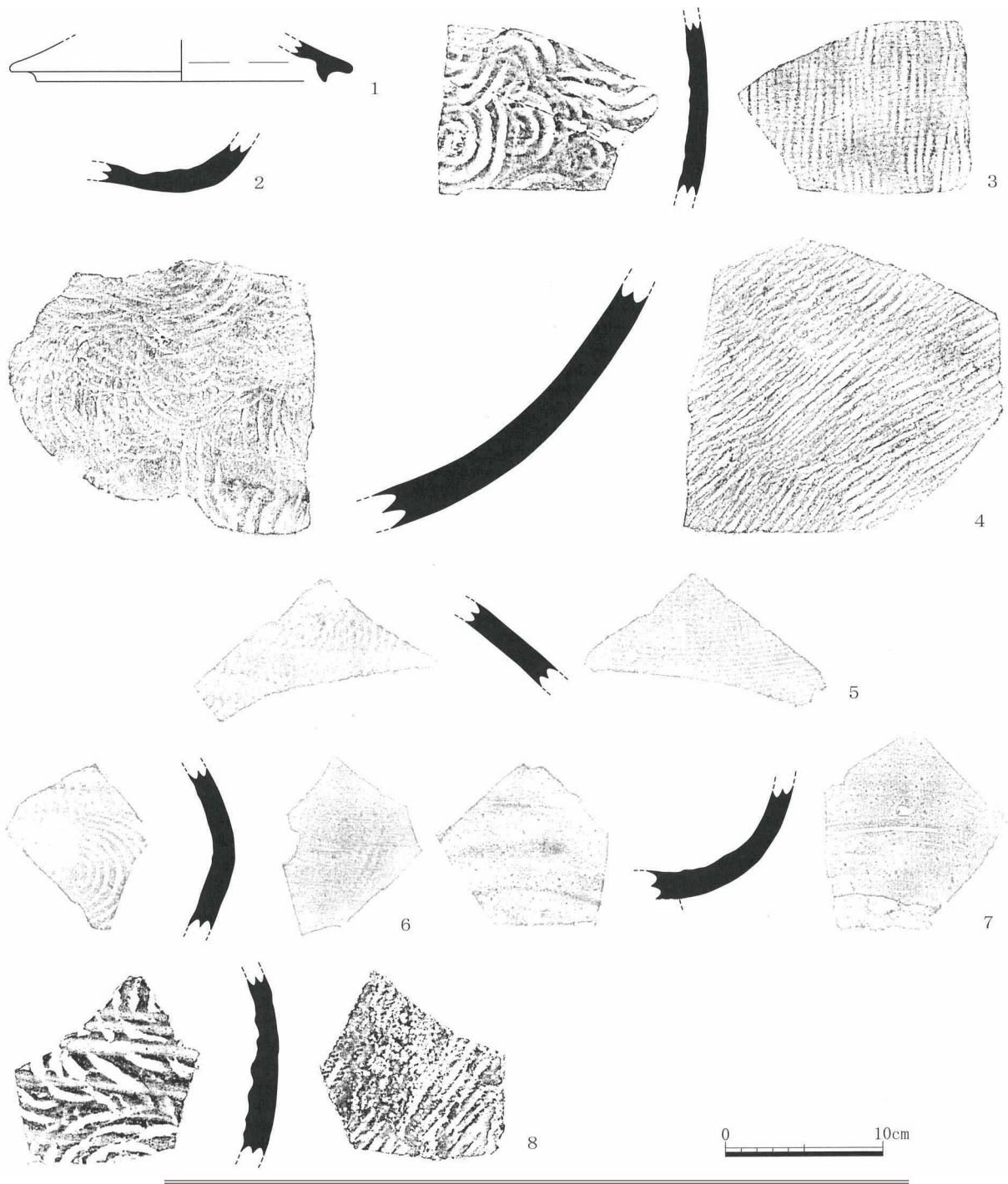


6 日ノ岡堤谷須恵器窯跡の出土遺物実測図(1:4, 1:2)

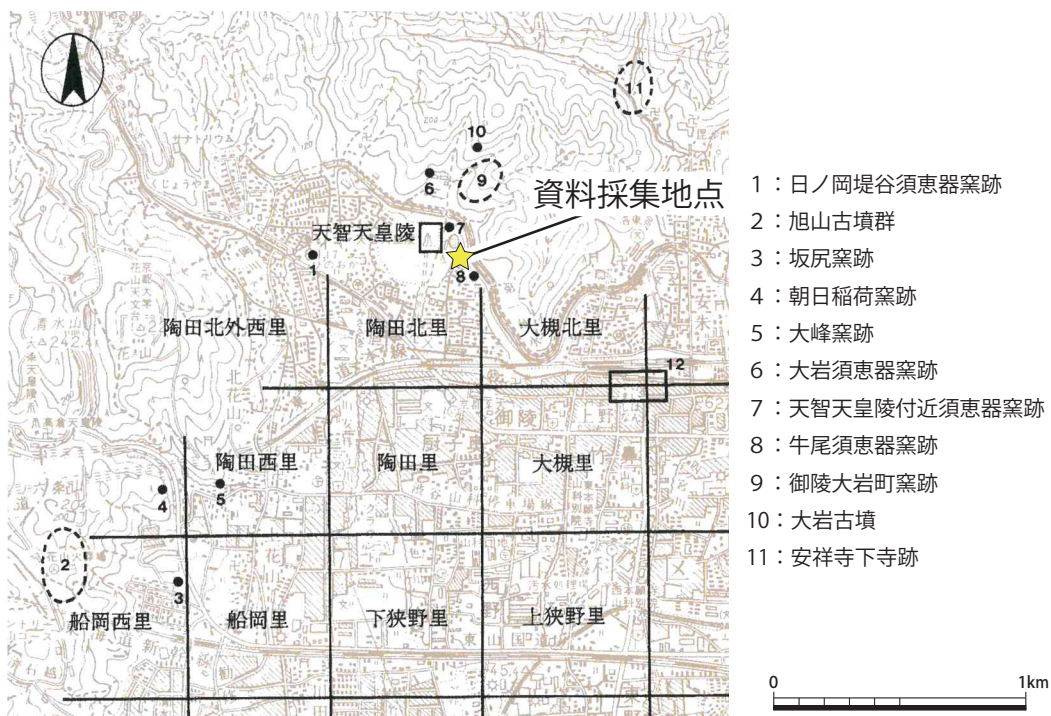
※『京都市埋蔵文化財調査概要 平成7年度』より転載

ながら製鉄遺跡と考えられている御陵大岩町遺跡も当該期に遡る可能性がある。窯跡については、窯業期間は7世紀第3四半期までにおさまる可能性が指摘されている⁴。

この窯跡に近接または重複して7世紀後半に天智天皇陵(御廟野古墳)が造営される⁵。なお、山科盆地で最古の寺院は大宅廃寺で、造営は7世紀第3四半期まで下る。



7 天智天皇（山科）陵内で採取・出土した須恵器（上 1：4 下 1：2）
『書陵部紀要』（陵墓編）のうち、横田真吾（2017）および加藤一郎（2021）報告より転載



8 山科盆地北部の主な遺跡と古代条理 (1 : 30,000)

丸川義広 (1996) より転載に加筆

(2) 山科盆地の窯跡群について

これまで踏査成果や表面採取資料からその存在が指摘されてきた。しかし、琵琶湖疏水をはじめ、早くからこの付近での開発が行われたこともあり、これまでに本格的な調査が実施され、様相が判明した事例は少ない。

その数少ない調査事例として、日ノ岡堤谷須恵器窯跡があげられる⁶⁾。ここでは平成7年に発掘調査が実施され、岩盤を掘削して築造した窯1基が確認された。この調査により、窯の構造や出土遺物の内容が明らかになっている。窯体の補修痕跡が少ないこと、床面に重複が認められないこと、灰原の規模が小さいことから操業期間が短期間に限られていた可能性が指摘されている。出土遺物は須恵器杯H・Gなどが確認されているが、数量的には杯Hが圧倒的に多いとされ、TK217型式期と報告されている。

ほかには、陵墓参考地である天智天皇陵(御廟野古墳)で水路整備工事に実施された立会調査の際に窯の焚口付近を確認しているが、出土遺物は確認されていない⁷⁾。ただし、周辺では飛鳥Ⅱ様式のものと思われる須恵器片が表面採集・出土しており、陵墓参考地内に所在する窯跡の時期を考える上で注目される。

本資料は、おおよその出土地点以外の情報は不明だが、窯跡に伴う遺物である蓋然性が高く、時期は概ね飛鳥Ⅱ様式に位置付けられる。この資料は日ノ岡堤谷須恵器窯跡よりも新しく位置付けられるとともに、御廟野古墳内で採集されている須恵器片とほぼ同時期と考えることが出来る。なお、外構柵修繕工事に伴う立会調査で遺物が出土した地点は、本資料の出土推定位置と極めて近く、時期的な齟齬も無いことから、同一の窯に由来する資料である可能性もある⁸⁾。

(3) まとめにかえて

今回、報告した寄贈資料は既に削平された可能性の高い須恵器窯跡の一端を示す資料として注目される。

山城国は王権の経済的基盤となった畿内の1つであり、御廟野古墳や平安京といった都城が設置された。これを踏まえると、この地域の遺跡の動態を追うことは、王権による地域把握の実態を明らかにすることにつながる可能性がある。

山科盆地は交通の要衝であり、古くから遺跡が確認されているにも関わらず、これまで明確な首長墓は確認されていない。しかし、古墳時代中期後半には中臣遺跡で初期群集墳と考えられる小型方墳のほか、韓式土器などが確認されている。また、古墳時代後期末から飛鳥時代にかけては、竪穴

建物や掘立柱建物が増加し、須恵器窯跡などの生産遺跡も確認されている。

詳細不明ながら、製鉄遺跡の可能性が想定されている御陵大岩町遺跡の存在も踏まえると、山科盆地は手工業の拠点となっていた状況が想定される。

南北朝時代に成立した『帝王編年記』には「山城国宇治郡」に中臣鎌足の「山階陶原家」が所在したとする記述があり、山科盆地北西部の窯跡群が所在する付近が、山科条里の「陶田里」に該当することから、その両者の関連性が指摘されている⁹⁾。

文献資料等と遺跡の動態については将来的に山科盆地の遺跡を総合的に捉えて大いに検討すべき課題である。しかし、現段階では不明瞭な点も多く残されていることから、まずは地道な基礎資料の整備を行い、土台をつくる必要がある。

くまい りょうすけ
熊井 亮介 (文化財保護課 文化財保護技師 (埋蔵文化財担当))

註

- 1) 西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』1982
- 2) 中久保辰夫「山科の遺跡と御廟野古墳」『古墳の週末と天智天皇陵』2023
- 3) 内田好昭ほか「12 中臣遺跡79次調査」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所2002
- 4) 森浩一「あとがきにかえて」『論集 終末期古墳』1973
- 5) 天智天皇は672年に崩御。
- 6) 丸川義広ほか「19 日ノ岡堤谷須恵器窯跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所1997
- 7) 横田真吾「天智天皇 山科陵水路その他整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』(陵墓編)第69号、2017
- 8) 加藤一郎「天智天皇 山科陵外構柵修繕工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』(陵墓編)第73号、2021
- 9) 丸川義広『日ノ岡堤谷窯跡の発掘』リーフレット京都No.88、1996

【参考文献】

- ・田辺昭三『須恵器大成』1981
- ・平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群I』1966
- ・奈良文化財研究所・歴史土器研究会『飛鳥時代の土器編年再考』2019